



# 佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学会  
〒290-0265 市原市今富1110-1  
☎0436-36-7611  
発行者 里 見 吉 英  
編集者 三 股 金 利

## 施設はビンボウ・・・!?

長良 幸男

庭の苦しみを十二分に味わいながら、平成五年四月、ふる里学会はオープンした。

今でこそ、施設は整備され景観も整ってきているものの、開設当時、周辺整備は職員と寮生での人海戦術により始まった。

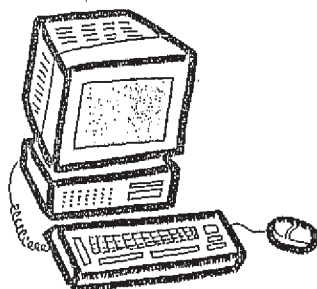
山のように積み上げられた芝を三股課長の陣頭指揮の下、寮生の芝運びに追い立てられ、職員が張ってゆく。見る見る内に、埃を立てていた土面は緑の芝生に生まれ変わってゆく。そして、夏季の散水・除草により、協和厚生園の三橋先生をもつてして、「県内で二番目に良くてきた。」(もちろん一番は協和厚生園である)と誉めていただける程、元気に根を張り今日に至っている。

椎茸山への進入路、畑の水切り用の溝、竹林の古竹整理と、全体作業に事欠くことはなかった。そうして、各作業科も徐々に作業らしくなり、販売出来るような物ができてきている。

一方、現場上がりの新米事務員の私はと言えば、何から手を付けて良いのかさえ判らず、ただ右往左往するだけの毎日だった。

特に忘れられないことは、初めての給料支給である。相変わらずあつちを広げ、こつちを読んでい

るうちに、気が付いた時には給料日が数日後に迫ってきていた。しかし、思うようにコンピュータは動いてくれず、とうとう前日に達してしまつた。「給料は銀行振込になります。」と職員に説明したのは私であり、わずか三週間前だった。それなのに、銀行への手続きがもう間に合わない所までできてしまつたのである。今になって給料日の変更など出来る訳がない。どうにか前日の夜、計算が終わり翌朝一番で銀行に駆け込み、施設に現金を持ち帰った。施設長・課長に袋詰めを手伝ってもらいようやく昼に支給することができた。こうして、冷や汗物の四月二十五日は終わった。



しかしこれが良い効果を生み出したのは皮肉である。職員の一ひとりが安い店を捜し出し、作れるものは作るという、姿勢が浸透していった。

フライングディスクの的は自転車。のりムを使つて作り、作業のバンプ椅子が、みるみる内に壊れていった時も作業科で作った。(高価なアルミ製が災いしたのか)

それでも施設会計が自転車操業であることに変わりはない。しかし、翌年になるとそれは一転し、一年間の運営実績・経験は大きくものをいい、自転車は乗用車へと変わっていった。

以降、学舎の事業は在宅支援の一環として、通所部の開設・増員、グループホームの運営と、各

種事業に取り組んでいる。施設の整備も順調に進み、作業棟の完成・翼の広場、そして今年度は地域交流スペースの完成をみた。毎年、新たな事業展開を続ける中、来年度は女子棟(定員二十名)の建設が予定されている。

開設当時の、施設長を始めとした私達の将来構想は着実に、また予想よりも早く進んでいる。

(庶務係長)

## 弟がいなかったら・・・

上條 絳子

私が子供の頃、家族は全てが弟中心に動いていた。父も母もとて

も多忙な毎日を送っていたが、弟に因っては決して手抜きをせずその時にできる限りの努力をしていた。姉と私の三人兄弟を両親は平等に育ててくれたが、母は「あなた達の事が後回しになつてしまつてごめんさいね。」という様な事を時々言つて、すまなそうにしていた。もし弟が普通

の男の子で生まれていたら、もっと違う生活があつたはずだ、と考へたりした事もあつたが、でも私は弟中心の生活を結構楽しんで

た。

小学生の時から私は、よく母にくっついて弟の通っていた施設へ顔を出したり、夏のお泊まり会等の行事に参加していた。そこには

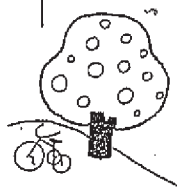
ユニークな子や、かわい子や、ちよびり怖そうなお兄さんがいて、そばには優しい先生がいた。独特のやわらかい空気と、ゆつたりとした時間が流れているその雰囲気、私は好きだった。

養護学校の運動会やバザー、弟の友人の家族たちと行った旅行等では、いつも多くの母親たちの明るさと逞しさに感心させられた。

弟の存在は、私の人生に本当に大きな影響を与えた。弟がもし障害を持っていなかったら、私は児童福祉施設の職員という仕事には就かなかつたらうし、主人と出会う事も無かつた筈だ。三人の我が子がこの世に生を受けたのも、言つてみれば弟がダウン症でいてくれたからだ。私は時々子供達に、

「英ちゃんがいなかったら、君達は生まれて来る事が出来なかつたんだよ。だから英ちゃんってすごいんだから。」と話している。これから長い時間と話ししていく中で、子供達が沢山の事を覚えて、人間として何が大切なのかを学んでくれたら、私はとても嬉しく思う。これから私がふる里学会へおじゃまする時には、是非、子連れで出掛けようと思う。

(井村 英司・姉)



## 「The City Of NAGANO」

あの1991年の開催地発表。沸き上がった歓声から七年の歳月を経て、雪と氷の祭典、長野オリンピックが開かれた。

「二十六年ぶりに日本でされる冬季五輪」

ひと口に二十六年といっても、札幌オリンピック前後に生まれた子供が今、長野の主役になっていることを考えると一世代を駆けて戻ってきたことになる。何を隠そう、二十六という数は僕の年齢でもある。

オリンピックベイビーの僕が行くオリンピック。母をたずねて三千里の心境なのか、はたまた巡礼の旅なのか等、旅行を担当している人達が「あーだこーだ」言いながら奔走しているのを尻目に、くだらないことを考えていた。

二月八日、祭りの開幕。全国共通の話題のためか、いつも同じパターンで会話が始まる。

「昨日オリンピック見た？」

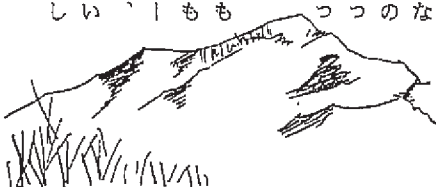
伊藤みどりの衣装に、あれじゃあ小林幸子だよと野次をいれ、スピードスケートの清水が、モーターで里谷が世界の頂点に立ち、ヤンヤンヤの大騒ぎ。そうそう、アイスホッケーの日本チームにもアドレナリンが溢れんばかりの大興奮。

そして原川。本当にしてやられた。大失敗か、大ジャンプか、ハラハラドキドキの連続に振り回され、見ている側が心配するほど彼の魅力にのめり込んでしまう。団体戦で金を取ったあのくしゃくしゃな顔は当分忘れられそうにもない。

今までウィンタースポーツに全然興味を示さなかった僕がこの人れ込みよう。瞬間湯沸かし器のような熱しやすく冷めやすい国民性と誰かが言ったものだが、甘んじてそれを受け入れよう。だって本当に楽しいのだから。

二月十八日

行きのバスでは皆それぞれ。新聞を広げる人もいれば寝てる人もあり。バスガイドに振り向きもせず終始ヘッドホンをつけ音楽を聴いているケルな人もいた。思い思いの時間を過ごしながら、バスは長野へとひたすら進む。窓の外を眺めていると、イビキをかく人が多くなるにつれ景色もしだいに寒さを帯びていった。



## ふる里学舎御一行様

## 白馬にて

堀口 貴宏

まず富士を正面に見据え、次に南アルプス、八ヶ岳が車窓を流れ、しばらくすると北アルプスへと変化していく。豊科で高速をおり、その山麓に広がる雪に覆われた山間地帯を抜け、落葉松林が見えてきたら到着である。湯が西の山に隠れようとする、夕方の四時近くであった。

泊まる場所は黒部ビューホテル。温泉につかり、その後宴会と定番通りの約束ごとを終え、部屋に置いてあったミカンをひと粒口に放りこんだら、今夜はおしまい。

二月十九日

孫悟空の如意棒をもつてしても屈かないぐらい天高く晴れあがった木曜日。白馬村のジャンプ競技場はひと、ひと、人で埋め尽くされていた。

さて我々が観戦したノルディック複合の団体だが、何と言っても注目度という点では萩原健司が一番。清々しい選手宣誓が印象に残り期待は高まるばかり。ここ最近、ピークは過ぎた、スランプとの声をよく聞くが必ず一発やってくるに違いない。そう信じていた。

競技が始まると、まさに一喜一憂。一人飛ぶごとに順位が変わり、会場の熱気のせいか汗がジワリと肌に浮かぶ。

そして大とり、萩原兄の登場。

パプーというラッパが代わり番こに現れ、手には丸。どこかしらか始まったウエーブの波が伝染するようにスタンドに拡がり、拍手喝采が競技場を包み込んでいく。スタートする瞬間に合わせ、全ての人がただ一点を見つめ天を仰ぐ。いよいよジャンプのとき。飛んでから数秒おいて……

……ああ……

萩原兄いる日本チームは五位に終わった。

ぞろぞろガヤガヤと競技場を後にする一行の中に、悪びれるわけでもなくケロリとした顔で「メイクドラマにはそれなりの舞台が必要なのさ」という声。そう、まだ明日がある。メダルへのレースは折り返したに過ぎないのだ。

もちろん僕としては大いなる余韻を胸に抱えて歩きながら、頭の中は閉会式で流れた、小沢征爾氏が指揮をとる交響曲「歓喜の歌」が何度もリフレインしていた。

## 流した涙

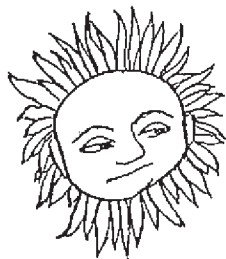
星 ワカコ

ついこの間、新人研修を受けたばかりだと思っていたのに、学舎に入り早いものでもう一年が経とうとしている。

振り返ってみると、何がなんだか分からずにひたすらに仕事を覚え、数々の失敗をくり返し、そして寮生と関わってきた一年であった。

昨年の今頃、卒論も書き終え、卒業旅行に飲み会にと遊び回っていたのだと思うと懐かしいが、一年後の今、その頃の自分と一体何が変わったのだろうと考えると、たいして変わっていない様な気がする。

思えば四月、学舎に就職先が決まり、自分はどの作業科に配属になるのだろうと胸をふくらませていたが、配属先は「生活」であった。普段、家の手伝いなど行わず、部屋の掃除もめったにしないこの私。加えて学舎に入って間もない頃、「星さ



## 編集 後 記

今冬はよく雪が降る。

今まで、学舎での行事は悪天候知らずでお日様だけは常に味方だったのに……

新人職員の中に、かなり強い気を発する雨女(男?)がいるに違いない。

一泊旅行で初めて雪が降り、バスの窓から銀世界を眺めながら改めて思う。

佐啓二十八号をお届けします。

遠山 貴子

んて、ズララだね。」と言わせた程のいいかげんさと極度の楽道家。

こんな私が「生活」という細かく、気配りを必要とするような所に配属となりこまでやってこれたのは、周りにいる先輩職員の厳しいアドバイスと流した涙のおかげだと思っている。

生活職員は作業と違い、日中寮生と関わるのが少ない。しかし、私が買ったソファに何げなく座り、愛用している姿をみたり、外出の際、私がそろえた服をかつこ良く着こなしている姿をみたりすると、自己満足と分かっているながらもたまになく嬉しくなる。

社会人としての自覚、一年目としての自覚をもって仕事を行ってきたかと尋ねられると決してそんな事はなかった。

四月より私は二年目として働く。

気張って立派な目標は立てないが、自分の納得のいく仕事をしたいと思う。